

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 20 号 (平成 28 年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XX, 2016

ヴェーダ散文文献に見られる Mārtāṇḍa
「死んだ卵の末裔」の物語

後 藤 敏 文

ヴェーダ散文文献に見られる Mārtāṇḍa 「死んだ卵の末裔」の物語

後藤 敏文

0. カール・ホフマンは、人類の祖先が女神アディティが死産した「死んだ卵」から生じたとする神話をヤジュルヴェーダの散文から収集し、リグヴェーダ [RV] に現れる *mārtāṇḍā-* の語も同神話に基づいて解釈し直されるべきことを示した。¹

Maitrāyaṇī Samhitā [MS], Śatapatha-Brahmaṇa [ŚB] にその名が挙げられるマルターンダ *mārtāṇḍā-* は **mṛta-āṇḍa-* 「死んだ卵」からの *vṛddhi* 派生形で、「死んだ卵（即ち、流産した未成形の肉の塊）から生まれた者」を意味する。リグヴェーダにおいて、この語は Sāyaṇa (14 世紀) 以来、一般に「鳥」と理解され、さらに太陽のことを謂うなどと解釈されてきたが、² 人間の始祖を意味し、失敗したお産から人間が誕生したというインドイラン共通時代に遡る神話が背景にあることをホフマンは示した。同論文には、ヤジュルヴェーダ散文に語られる神話の原文、翻訳が提示され、詳細に検討されている。

イラン側の伝承は断片的なものに留まるが、新アヴェスタ語 *Gaiia-Marətan-*、パフラヴィー語 *Gayōmart*、原義「死すべき者・人の、命」³ が

¹ K. HOFFMANN *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 11 (1957) 85–103 = Aufsätze zur Indoiranistik II, herausgegeben von J. NARTEN (1976) 422–438. 英訳版: German Scholars on India, II (1976) 100–117 = Aufs. III (1992) 715–735.

² H. FALK “Die Kosmogonie von RV X 72” (*WZKS* 38, 1994, 1–22) 15–18 は謂わば伝統説を採るが、HOFFMANN が新たに提示したヴェーダ散文文献資料とその理解とを拒絶した上に成り立つ主張の列挙に過ぎない。ŚB のヴァージョン (4.) を見れば事情は明白である。— 事実、この語は叙事詩 *Skt.* において、*mārtāṇḍa-* の形で、「太陽、太陽神」を意味するに至る、cf. HOFFMANN 86 = 423. *mārtāṇḍa-* と *āditya-* 「太陽」(→注 14) との関連が知られていたものであろう。

³ *marətan-* は古アヴェスタ語 *marəta-* (<**martá-*) または *maša-* (= ved. *mārta-*)

それに当たる。Bundahiṣn に、人間が *Gayōmart* の子孫としてその似姿として生まれたこと、*Gayōmart* の身体の幅が高さと同じであったとされることなどは特に注目される。

知られることの少ないヴェーダ散文における *mārtāṇḍā*-「死んだ卵の末裔」に関する全伝承を、ホフマンが当時利用できなかった *Vādhūla-Anvākhyāna* [*VādhAnvākh*] のヴァージョンをも含めて、日本語で改めて検討し、ここに紹介する。さらに、マールターンダは登場しないが、同様の神話を含む *Taittirya-Brahmaṇa* [TB] を合わせて取り上げる。黒ヤジュルヴェーダに属する 1. マイトラーヤニーヤ派、2. カタ派、3. タイッティリーヤ派 (3.1. TS, 3.2. TB, 3.3. *VādhAvākh*), 4. 白ヤジュルヴェーダに属するヴァージャサネーイン派のシャタパタ・ブラーフマナ、*Mādhyandina* 版 (4.1.) および *Kāṇva* 版 (4.2.) の順に取り上げる。5. に諸伝承の中味とそれらの関係について簡単な観察を纏め、6. にリグヴェーダ創造讃歌 X 72 を参考として挙げる。

1. マイトラーヤニーヤ派

Maitrāyaṇī Saṁhitā I 6.12: 104, 9–105, 7⁴

yāsya rātrīyāḥ prātār agnīm ādhāsya mānaḥ syāt tām rātrīm cātuḥśarāvam

「死すべき者」から individualisierendes Suffix (特化の接尾辞) *-n-* によって作られた語形で、*Gāthā* に「死すべき者、人」の意味で用いられている、cf. HOFFMANN “Ein grundsprachliches Possessivsuffix” (*Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 6, 1955, 35–40 = Aufsätze II [→注 1] 378–383) 36 = Aufsätze 379. *gaiia-* は古・新アヴェスタ語で「生命」を意味する。*marōtan-* の基に形容詞の存在を仮定すれば、*Gaiia-Marōtan-* は「死を持つ命」、「人の命」と解されるであろう。さらに、*Gaiia-Marōtan-*、*Gayōmart* については HOFFMANN 前掲論文 96–100 = 431–435 参照。

⁴ Cf. HOFFMANN 上掲論文 87–89 = Aufs. II 424–426; H. KRICK *Das Ritual der Feuergründung (Agnyādheya)*, herausgegeben von G. OBERHAMMER (, Ch. WERBA), Wien 1982, 269–271; K. AMANO *Maitrāyaṇī Saṁhitā I–II*, Bremen 2009, 254–256. 祭火設置祭における振舞粥に関する部分 (→注 8) に語られる。

odanām paktvā brāhmaṇébhyo jīvātāṇḍulam ivōpahared.

āditiṛ vāi prajākāmaudanām apacat. sōṅśiṣṭam āśnāt. tāsya dhātā cāryamā cājāyetām. sāparam apacat. sōṅśiṣṭam āśnāt. tāsya mitrās ca vāruṇās cājāyetām. sāparam apacat. sōṅśiṣṭam āśnāt. tatas āmśas ca bhagās cājāyetām. sāparam apacat. sāikṣatōṅśiṣṭam me 'śnatyā dvāudvau jāyete, itō nūnām me śréyaḥ syād yāt purāstād āśniyām iti. sā purāstād āsitvōpaharat. tā antār evā gārbhaḥ sāntā avadatām. āvām idām bhaviṣyāvo yād ādityā iti. tāyor ādityā nirhantāram aichams. tā āmśas ca bhagās ca nirhatām. tasmād etāu yajñē +nā yajante. 'mśapṛāsō 'mśasya bhāgadhēyaṃ. jānaṃ bhāgo 'gachat. tasmād āhur. jāno gantavyās. tātra bhāgena sāṃgachatā iti. sā vā indra ūrdhvā evā pṛāṇām +anūdāśrayata (→注 12) mṛtām itaram āṇḍām āvāpadyata. sā vāvā mātāṇḍō yāsyemē manuṣyāḥ prajā. sā vā āditiṛ ādityān ūpādhavad. āstv evā ma idām. mā ma idām moghē pārāpaptad iti. tē 'bruvann. athaiṣō 'mākam evā bravātai. nā nō 'timanyātā iti. sā vāvā vīvasvān ādityō yāsya mānuṣ ca vaivasvatō yamās ca. mānur evāsmiṃl lokē yamō 'mūṣmin.

その夜の⁵翌朝、[自分の]祭火を設置することになる者があるならば、その夜に、4 枘分の粥を炊いてバラモンたちに、丁度、生きている穀粒の状態⁶で供すべきである。アディティ *āditi*⁷ は子孫を欲して、粥を炊いたのだ。彼女は残りを食した。⁸ 彼女には⁹ ダートリ *dhātār-* (「創造者」とア

⁵ *rātryās*。RV においては *-i* 語幹 *rātri-* であるが、その後 *-i* 語幹 *rātri-* の語形が現れ、古典期の *rātri-* に引き継がれる。ここは *-i* 語幹の Genitiv である。引用に後続する部分には Akk. *rātrīs* (*-i* あるいは *-i* 語幹), Nom. *rātrayas* (*-i* 語幹) が見られる。

⁶ *jīvātāṇḍulam iva*。煮崩れていない、胚が取れていない状態を謂う (cf. KRICK 上掲書 269 n. 668)。*cāru-* と *odanā-* については、永ノ尾信悟「古代インド祭式文献に記述された穀物料理」(『国立民族学博物館研究報告』9-3, 1984, 521-532) 524f. Sh. EINOO “Altindische Getreidespeisen” (MSS 44, Fs. Hoffmann, 1985, 15-27) 18f. 参照。

⁷ 原義は「拘束を持たない、自由の」女神。

⁸ バラモンたちに振る舞った残りを自ら食した。agnyādhāna (agnyādheya, 祭火

リヤマン *aryamān-* とが生まれた。彼女はもう一つの [粥] を炊いた。彼女は残りを食した。彼女には (→注 9) ミトラ *mitrā-* とヴァルウナ *vāruṇa-* とが生まれた。彼女はもう一つの [粥] を炊いた。彼女は残りを食した。彼女にはアンシャ *āmśa-* とバガ *bhāga-* とが生まれた。彼女はもう一つの [粥] を炊いた。彼女は熟慮した、「残りを食すると私には [息子が] 二人ずつ生まれる; これより優れたことが、今、私にはあるだろう、私が先に食するとしたら」と。彼女は先に食してから [残りを] 供した。二人がまさしく内側で、胎児 (単数) であるのに、声をたてた、「[今] アーディッテヤ神たち *ādityā-* (「アディティの息子たち」) が持っているこの [支配権]、それを我々二人は持つだろう¹⁰」。

二人を墮胎させる者をアーディッテヤ [神] たちは探した。両者をアンシャとバガとが墮ろした¹¹。それゆえ、この両者を人々は祭らない (祭式

設置祭) における *brahmaudana* (4 祭官への 4 枘分の粥の供応, cf. KRICK 上掲書 232ff., 262ff.) の意味付け中に語られる。*brahmaudana* は典型的に *sava* とよばれる供応儀礼の一つであり、願望祭の一形態としてのそれから祭火設置祭 *agnyādheya* の前に取り込まれたものとも考えられる, cf. KRICK 上掲書 235f.

⁹ 動詞 *janⁱ* 「子を作る」の構文は OERTEL *Zu den Kasusvariationen in der vedischen Prosa. Zweiter Teil*, München 1938, 6-28 (=Kleine Schriften. Teil II, herausgeg. von H. HETTRICH und Th. OBERLIES, Stuttgart 1994, 1016-1038) に集められている。母は通常 Ablativ で表されるが (同書 1032ff.), ここでは、彼女の考えを述べた後続の文中に現れる *me 'śnatyā(s)* から, *tāsyā(s)* は Genitiv と判断される (→注 29 をも参照)。父については Genitiv が一般的であるが (同書 1020ff.), 同書 1035f. に纏められた母の Genitiv の用例は全て Aditi に関する場合であり、父なしで、女性が生きた姿の穀粒を食して子を作った特殊な場合故の構文と判断される。母系、農耕 (定住)、場合によっては穀霊を示唆する点でも興味深い。

¹⁰ *idam as/bhū* 構文, cf. HOFFMANN *Aufs. II* (→注 1) 557-559, 後藤「荷車と小屋住まい: ŚB *sālām as*」*印度学仏教学研究* 55-2 (2007) 809-805, Gotō "Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: *sālām as* im Śatapatha-Brahmaṇa" *Indologica. T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*, 1 (2008) 115-125.

¹¹ *nir-hav:* HOFFMANN 上掲論文 88 n. 10 = *Aufs. II* (→注 1) 425 n. 10, RAU *Staat und Gesellschaft im alten Indien*, Wiesbaden 1957, 97 n. 5; ŚB IX 5.1,62, III 1,2,21, XIV 9.4,22 = BĀU VI 4.22 (BĀU-K 23), AVP V 12, 7, GELDNER *Der Rigveda*, Cambridge, Mass. 1951 zu I 101,1.

によって称えない)。賭け金(賭博で手持ち[アンシャ]として投ずるもの)がアンシャの(に定められた)分け前である。バガは[よその]人々のもとへ行った。それ故人々は言う、「[よその]人々のもとへ行くべきだ。(ひとは)そこで幸運(バガ)と出会う」と。するとインドラ *indra-* は(その胎児の)息について上へ向かって出て行ったのだ¹²; 死んだ方の卵は下へ落ちた。それがマールターンダ *mārtāṇḍā-* (「死んだ卵から生まれた者」)である、この(地上の)人類たちが彼の子孫であるところの。

かのアディティはアーディッテヤ神たちのもとへ(助けを求めて)走った、「私のこれは存在せよ(これは生きるように)。私のこれが空しい所に消えてしまうことがないように」と。彼らは言った、「それでは、この彼は我々の(一員と)名乗るがよい¹³。彼は我々を凌ぐと思わないように」と。彼はアディティの息子¹⁴ヴィヴァスヴァント(輝き亘る者)なのだ、それに¹⁵ヴィヴァスヴァントの子マヌ *mānu-* とヤマ *yamā-* とが¹⁶属するところ

¹² インドラが胎児の生气について上昇した。後出のヤマと合わせて考えると、ヤマ=天界にいるインドラ(即ち、太陽)が人の永遠の生命とする観念が背景にあるとも考えられる、→注 26。HOFFMANN (89=425, 102f.=437f.) はインドラの息(生气)と解するが、後に、BĀU IV にヤージュニャヴァルキヤ説としてまとめられるに至る死時に身体を出て行く「アートマン-生气-生体諸機能」の結合体のごときものを考えるのが妥当と思われる、cf. *indriyā-* 「器官の力、生命力」。SCHROEDER はエディションに *prāṇāmam udāśrayata* の読みを採り、*prāṇāmān udāśrayata* と訂正している (IV 309)。SĀTAVALEKAR は *prāṇām anudāśrayata* とする。CALAND ZDMG 72 (1918) 6 は *prāṇām anudāśrayata* を提案し、HOFFMANN もこれに従う。*prāṇām ānudāśrayata* 「生氣の後について…」も考えられるが、写本に支持されない。*-āśrayata* のアクセントは文が終わっていないことを示す “antithetischer Akzent” である。

¹³ *bravātai:* hypercharakterisierter Konj.

¹⁴ ここでは単数。地上で生きるマールターンダは「アディティの息子 *Vivasvant-* (輝き亘る者、曙光)」である。*ādityā-* 「アディティの息子」は、単数では普通「太陽」を意味する。RV において既にこの用法が在証される: I 50,13, I 191,9, VIII 101,11, さらに *āditeyā-* X 88,11 (HOFFMANN 100=435)。→注 26。

¹⁵ Genitiv: (派生の基としての) 帰属、あるいは *janī* 「子を作る」+父の Gen. の構文を背景とするか。あるいは、「ヴィヴァスヴァントの子マヌとヤマとがその[子孫で] あるところの」、cf. *tāsyemāḥ prajāḥ* ŚB III 1,34 (4.1.), ŚBK IV 1,3,3 (4.

の、他ならぬマヌはこの世において、ヤマはあの [世] において。

アーディッテヤ神たち（「アディティの息子たち」）はリグヴェーダ以来 7 神とされ、1. Varuṇa, 2. Mitra, 3. Aryamaṇ, 4. Bhaga, 5. Amśa, -, 7. Dakṣa という序列を持つ。それぞれ、王権、契約、部族慣習法、分配、（個人の）取り分、（部族、社会において果たすべき）能力を意味し、社会制度が神格化されたものである。一貫して 7 神とされながら、6 番目の神格は固定されておらず、おそらく必要な文脈に従って、Indra, Savitar などが当てられる。¹⁷ここでは、ダートリ Dhātār「創造者」が筆頭に挙げられ、Dakṣa が現れない理由が不明である。（あるいは、RV X 72 [→ 6.] に見られる Aditi → Dakṣa → Aditi の発生を意識した上で母系的系譜を避け、Dakṣa を創造者 Dhātār に置き換えて筆頭に置いたものか。)

2.)。ヤマはインドイラン共通時代からヴィヴァスヴァントの子として知られる：インド *Yamā- Vaivasvatā-*、イラン (jav.) *Yima- Viuuuay^vhana- (Viuuuay^vhan^t-* の息子)。

¹⁶ *ca* の位置によって、*vaivasvató* は *mānuś* に懸かることが解る。

¹⁷ M. WITZEL-T. Gorō Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis, Frankfurt a. M. 2007, 825 (Gorō による Glossar, s. v. Ādityas), 後藤敏文「インド・アーリヤ諸部族のインド進出を基に人類史を考える」(『国際哲学研究』3号, 2014, 43-57) 47, 『世界神話伝説大事典』勉誠社 (印刷中)「1. ヴェーダの神話・伝説」の項参照。ゾロアスター教の女神 Anāhitā の原義は「結び付けられていない」を意味し、Aditi「無拘束の」と Anāhitā とが共通の源からの借用翻訳であることについては、Gorō “Vasiṣṭha und Varuṇa in RV VII 88—Priesteramt des Vasiṣṭha und Suche nach seinem indoiranischen Hintergrund” (Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik, herausgeg. von B. FORSSMAN und R. PLATH, Wiesbaden 2000, 147-161) 160f., 『国際哲学研究』同所参照。なお、アーディッテヤ神たちもインド・イラン共通時代に背景を持つ可能性は、ゾロアスター教の新アヴェスタ語文献に現れるアメシヤ・スペンタ *amaša-spənta*「神聖なる不死の者たち」(良き思考, 最善の真理, 望ましき支配権など) が古い文献箇所では 7 とされ、しかも、具体的には 6 概念のみが挙げられていることから推測される。

2. カタ派

Kāṭha-Saṁhitā XI 6: 151, 3-151, 19¹⁸

*ādityēbhyo dhārāyadvadbhyaś carūṁ nīrvaped āparuddho vāparurut-
syāmāno vādityā vai trātāra. ādityā aparoddhāras. tān evā bhāgadhéyenó-
padhāvati. tá enaṁ dādhraty.*

ādityēbhyo bhūvadvadbhyaś carūṁ nīrvaped búbhūṣann.

*āditir vai prajākāmaudanām apacat. tāsyočchiṣtam āśnāt. śā gārbham
adhatta. tāta ādityā ajāyanta. sāmānyateto me śrēyāṁso 'janiṣyanta yāt
purástād āśiṣyam (→注 24) iti. śāparam apacat. tāsyo bhayāta āśnāt purástac
copāriṣṭac ca. śā gārbham adhatta. so 'ntār evā gārbho avadat. tā ādityā
amānyantāyāṁ ca (→注 25) vai janiṣyāte sā evédāṁ bhaviṣyatīti. tám
nīraghnan. sā nīrasto 'śayat. śā trṭīyam apacad ādityēbhya evāstv evā sā yās
tāsmād yōner ābhūd yāsmād yūyām āsṛjyadhvam iti. tám sāmaskurvāms.
tāsya yān mṛtām āsīt tād āpākṛntan. sā hasty ābhavad. yāj jivām sā vīvasvān
ādityās. sā nā tāthāsīd yāthā tēna bhavitavyāṁ. sā etām ādityēbhyo
bhūvadvadbhyaś carūṁ nīravapat. svó vai svāya nāthitāya suhṛdayātamas.
svān evópādhāvat. tāto vai so 'bhavad. ādityā imāḥ prajāḥ.*

*svās svāya nāthitāya suhṛdayātamas. svān evā bhāgadhéyenópadhāvati.
bhūtyai. bhāvaty evādityā bhāgāṁ vaḥ kariṣyāmīti nīrvāpan brūyād. imām
amūṁ amuṣyāyaṇām amuṣyāḥ putrām amuṣyāṁ viśy āvagamayateti.
bhāgadhéyam evāibhyaḥ kurvān prāha. tám ādityēbhyaś carūṁ nīrvapaty.
ādityā vai devaviśā. devaviśā manuṣyaviśāyā īše. devaviśāivāinam manu-
ṣyaviśām āvagamayati.*

¹⁸ Cf. HOFFMANN 上掲論文 89-90 = Aufs. II 426f., KRICK (→注 4) 273 n. 679; W. CALAND Altindische Zauberei, Amsterdam 1908, 66: No. 97, 98. 願望穀物祭 kāmyeṣṭi を扱う部分に語られる。追放された王の復権を願望する部分を冒頭に付加したものとと思われる。TS II 3,1 に並行箇所があるが、そこにはマールターンダ関連の神話は見られない。

dhārāyant- の語をもつ (*dhārāyadvabhyaḥ*) アーディッテヤたちに¹⁹ 粥を用意して捧げるべきである²⁰, [王権から] 排斥された, または, 排斥しようとして意図されている者²¹ は。アーディッテヤたちは救済者たちなのだ。アーディッテヤたちは排斥者たちである。他ならぬ彼らに [彼らへの] 配分をもって助けを求めて走ることになる。彼らは当の者を支える²²。

bhū の語をもつ (*bhūvadvabhyaḥ*, →注 19) アーディッテヤたちに²³ 粥を

¹⁹ *dhārayānta ādityāso jāgat sthā¹ devā viśvasya bhūvanasya gopāḥ* 「動くもの、留まるものを保持しているアーディッテヤたちは、あらゆる世界(生じるもの)の守護者たる神々である」(この詩節は=RV II 27, 4) 以下に挙げられる *yājyānuvākyaḥ* (XI 12: 159, 18-) を指す。CALAND Ai. Zauberei (→注 18) 68: MS IV 12.1: 177, 9-12 参照。*dhārāyadvad-*, *bhavad-* などの動詞語形引用法については, B. LIEBICH Zur Einführung in die indische einheimische Sprachwissenschaft, II, Heidelberg 1919, 13-17, Ch. WERBA Verba Indoarica, Wien 1997, 128-136, 特に 129 n. 19, Gotō Kratylos 46 (2001) 65f. 参照。

²⁰ *nir-vap* は必要な分量の穀物を箒に取り出す行為を指し, これに引き続き調理, 献供までの全過程を表現する術語として用いられる。*puroḍāśa* (「捧げ物」, パンケーキを指す) について用いられることが多い。Cf. CALAND (Das Śrautasūtra des Āpastamba, Buch 1-7, Göttingen 1921) zu VII 13,8 n. 4, zu I 7; Gotō “Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbuns -anhand des Altindoarischen-” (Indogermanische Syntax -Fragen und Perspektiven-, herausgeg. von H. HETTRICH, Wiesbaden 2002, 21-42) 40f.

²¹ *aparurutsyamāna-*: Desiderativ の Passiv, cf. HOFFMANN Aufs. II (1976) 573 n. 24. 並行箇所 TS II 3,1,1 は *aparudhyāmāna-*。 *apa-rodh/rudh* 「追放する」については SCHAEFER Das Intensivum im Vedischen, Göttingen 1994, 141 n. 418 (mit Lit.) をも参照。

²² 3. Pl. *dādhrti*: 現在の価値で用いられる [3. Sg. *dādhāra* :: 3. pl. *dhārāyanti*] の組 (cf. B. DELBRÜCK Altindische Syntax, Halle 1888, 297) から新たに作られた現在語幹による。SCHAEFER 上掲書 141 をも参照。*dādhāra* に対する Ipf. **adādhar* (-t) から 3. Pl. *dādhrati* ないし 3. Sg. *dādharti* (JB) が作られたものか。

²³ KS XI 12: 159, 17 に *pratika yājño devānām* || で指示される *yājño devānām prātīy eti sumnām¹ ādityāso bhāvataḥ mṛḍayāntaḥ | ā vo¹ arvācī sumatīr vavṛtyād¹ amhós cid yā varivovittarāsat* 「祭式は神々の厚意に応じて行く。アーディッテヤたちよ, 寛恕ある者たちとなれ。君たちの好意はこちらへ向きを変えてほしい, 窮地にさえ, よりよく自由空間を見出すものであるべく」 (=RV I 107, 1)。TS II 1, 11, 4 は o と p の 2 マントラを指示, cf. CALAND Ai. Zauberei (→注 18) 65。

用意して捧げるべきである、繁栄を願う者は。

アディティは子孫を欲して粥を炊いたのだ。〔彼女は〕その残りを食した。彼女は胎児を宿した。それから (*tātas*, [あるいは:] すると) アーディッテャたちが生まれた。彼女は思った、「これよりもっと優れた者たちが私には (→注9) 生まれていただろう、もし前もって私が食していたら」²⁴と。彼女はもう一つの〔粥〕を炊いた。それを両様に食した、先にと、後からと。彼女は胎児を宿した。その胎児は、まだ(胎)内で声を立てた。彼らアーディッテャたちは思った、「この者が生まれることになれば、²⁵彼こそがこの〔支配権に〕至るだろう (→注10)」と。彼を〔彼らは〕墮胎させた。彼は流産されて横たわっていた。彼女は第3〔の粥〕を炊いた、ほかならぬアーディッテャたちの為に。「君たちが創り出されたその母胎から〔今まさに〕生じた彼が存在し〔続ける〕ように」と〔彼女は言った〕。〔アーディッテャたちは〕彼を整えた。彼の死んでいたもの、それを〔彼らは〕切り離した。それは象となった²⁶。生きて〔いた〕もの、それはアディティの息子ヴィヴァスヴァント(輝き亘る者)(→注14)〔となった〕。彼は彼がそうあるべき様ではなかった。彼は、この、*bhū*の語をもつアーディッテャたちに、粥を用意して捧げた。一身内の者が助けを求めている身内の為に最も好意を持つのだ。— ほかならぬ身内のものたちに彼は助けを求めて走った。それから (*tātas*, [あるいは:] すると) 彼は繁栄したのだ。これら(地上の人間の)子孫たちはアディティに由来する。

身内の者が助けを求めている身内の為に最も厚意を持つ。ほかならぬ身内のものたちに〔彼らへの〕配分をもって〔ひとは〕助けを求めて走る。

²⁴ *ajāniṣyanta, āśiṣyam*: 明確な Konditional の早期の用例の一つ。

²⁵ *ca* による仮定文、定動詞はアクセントをもっている。「これが生まれることになり、そして、」から展開したとも考えられる。

²⁶ 象 *hastīn-* (Mārtāṇḍa の切り離された部分) は AV III 22,4 *yāvat sūryasya vārcas āsurāsya ca hastīnaḥ* 「太陽にある限りの効力、そして、アスラに属する象の〔効力〕」、太陽と死神 (*mṛtyū-*) との同置 (ŚB II 3,3,7; 太陽も手=光線を持つ)、白象の *avakrānti-* による Māyā の懐胎(日氏)など、太陽に連なる観念に関わる可能性を示唆する。→注12, 注14, 注45。

繁栄の為にである。彼はまさしく繁栄することになる。〈アーディッテヤたちよ、君たちへの配分を私は作りだそう〉と〔粥を〕用意して捧げる時、唱えるべきである、〈この某、某の息子、某女の息子を、某の部族のもとへ立ち至らせよ（迎え入れさせよ）〉と。ほかならぬ配分を彼らのために作りながら公言することになる。その粥をアーディッテヤたちのために用意して捧げる。アーディッテヤたちは神々の部族なのだ。神々の部族は人間たちの部族を支配している。ほかならぬ神々の部族が、当の者を人間たちの部族に立ち至らせる（迎え入れさせる）ことになる。

3. タイッティリーヤ派

3.1. Taittirīya-Saṁhitā VI 5,6,1-2²⁷

āditiḥ putrākāmā sādhyébhyo devébhyo brahmaudanām apacat. tāsya uccheṣaṇam adadus. tāt prāśnāt. śā réto 'dhatta. tāsyaī catvāra ādityā ajāyanta. śā dviṭīyam apacat. śāmanyatocchéṣaṇān ma imē 'jñata. yād āgre prāśiṣyāmītō me vāsīyāmsō janiṣyanta iti. sāgre prāśnāt. śā réto 'dhatta. tāsyaī vyṛddham āṇḍām ajāyata. sādityébhya evā ||1|| tṛṭīyam apacat. bhógāya ma idām śrāntām astv iti. té 'bruvan. vāraṁ vṛṇāmahai. yō 'to jāyātā asmākam śā éko 'sad. yō 'sya prajāyām ṛdhyātā asmākam bhógāya bhavād iti. tāto vívasvān ādityō 'jāyata. tāsya vā iyām parajā yān manuṣyās. tāsv ēka evārdhō yō yājate. śā devānām bhógāya bhavati.

アディティは息子を欲してサーディヤの神々に婆羅門接待用の粥を炊いた。²⁸ 彼女に彼らは残りを与えた。それを彼女は食した。彼女は精子を

²⁷ Cf. HOFFMANN 前掲書 90-91 = Aufs. II 427, KRICK (→注 4) 263 n. 650. ソーマ祭の夕のソーマ搾りに際して行われる ādityagraha (cf. CALAND-HENRY L'agniṣṭoma, Paris 1906, 330ff. 例えば ĀpŚrSū XIII 9,1-10,4) を扱う部分に語られる。

²⁸ *sādhyā*-たちとは、アングラス *āngiras*-たちと共に、宇宙や神々の誕生に先立って存在する「あるはずの」神々である。ここでは、アーディッテヤたちが生まれる以前に存在し、祭式の接待客（婆羅門）として招かれたことになる。

[自らの中に] 置いた (受胎した)。彼女には²⁹ 4 [神] のアーディッテヤたちが生まれた。彼女は第2 [の粥] を炊いた。彼女は思った、「残りから、この者たちが私には (→注 29) [今まさに] 生まれた。もし始めに私が食するなら、これよりもっと良い者たちが私には (→注 29) 生まれるだろう」と。彼女は始めに食した。彼女は精子を [自らの中に] 置いた。彼女には (→注 29) 欠陥を持った卵³⁰ が生まれた。彼女はほかならぬ (先に生んだ) アーディッテヤたちの為に ||1|| 第3 [の粥] を炊いた。「この努力の結果が私の役に立つものであれ」と言いつつ。彼らは言った、「我々は褒美を選びたい。これから生まれることになる者、彼は我々の一員となるように。彼の子孫において、成功することになる者、[その者は] 我々の役に立つように」と。それから (*tātas*, [あるいは:] すると), アディティの息子ヴィヴァスヴァント (輝き亘る者) (→注 14) が生まれた。彼のこれは子孫なのだ, 人間たち *manuṣya-* であれば。(自らの為に) 祭式を行う者は, かれら (アーディッテヤたち) の中で, ほかならぬ成功した一員である。彼は神々の役に立つようになる^{30a}。

3.2. Taittirīya-Brāhmaṇa I 1,9,1-3

āditiḥ putrākāmā | śadhībhya devēbhya brahmaudanām apacat | tāsyā

²⁹ MS は Genitiv に °ās の形を用いているが (→注 9), TS, TB は Genitiv の価値をもつ「神学者たちの」Dativ °ai を用いる。Genitiv として機能していることは, *ma imē jñāta* の *me* によって示される (cf. OERTEL [→注 9] 25=1035: 18-1)。動詞 *janī* の構文においては, 母は主として Ablativ で表され, Dativ の例は存在しない。Genitiv, Ablativ として機能する °ai については, Gorō Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian background, Wien 2013, 12, n. 25 参照。

³⁰ *āṇḍa-* が胎児を意味する用例は GB II 6, 25 に見られる: *trivṛd vai retaḥ siktam sambhavaty āṇḍam ulbaṇ jarāyu* 「精子は注がれると三重に生じ成るのだ: 卵 (胎児), 羊膜, 絨毛膜 (あるいは胎盤) に」, 西村直子「ヴェーダ文献における胎児の発生と輪廻説」(印度学宗教学会『論集』36, 2009, 100-76) 95 n. 15 参照。

^{30a} 神々とアディティを介しての人間たちとの取り引きは RV X 95 「ブルーラヴァスとウルヴァシー」の末尾第 18 詩節を想起させる。そこでは, 人間が死後神々の一員となり, 彼の子孫が供物によって神々を祭るよう, 神々が告げる。

*uccheṣaṇam adaduḥ | tāt prāśnāt | śā réto 'dhatta | tāsyaī dhātā cāryamā
cājāyētām | śā dviṭīyam aṣacat ||1|| tāsya uccheṣaṇam adaduḥ | tāt prāśnāt | śā
réto 'dhatta | tāsyaī mitrás ca váruṇas cājāyethām | śā tṛtīyam aṣacat | tāsya
uccheṣaṇam adaduḥ | tāt prāśnāt | śā réto 'dhatta | tāsya āmśas ca bhāgas
cājāyethām | śā caturthām aṣacat ||2|| tāsya uccheṣaṇam adaduḥ | tāt prāśnāt |
śā réto 'dhatta | tāsya īndras ca vívasvāms cājāyethām | brahmaudanām
ṣacati | réto evā tát dadhāti | prāśnanti brāhmaṇā odanām | yád ājyam
ucchiṣyate | téna samídho 'bhyájyādadhāti | uccheṣaṇād vā áditī réto 'dhatta
||3|| uccheṣaṇād evā tát réto dhatte |*

アディティは息子を欲してサーデイヤ *sādhya-* の神々 (→注 28) に婆羅門 (祭官) 接待用の粥を炊いた。彼女に彼らは残りを与えた。それを彼女は食した。彼女は精子を [自らの中に] 置いた (受胎した)。彼女には (→注 29) ダートリとアリヤマンとが生まれた。彼女は第 2 の [粥] を炊いた。彼女に彼らは残りを与えた。それを彼女は食した。彼女は精子を [自らの中に] 置いた (受胎した)。彼女には (→注 29) ミトラとヴァルウナとが生まれた。彼女は第 3 の [粥] を炊いた。彼女に彼らは残りを与えた。それを彼女は食した。彼女は精子を [自らの中に] 置いた (受胎した)。彼女には (→注 29) アンシャとバガとが生まれた。彼女は第 4 の [粥] を炊いた。彼女に彼らは残りを与えた。それを彼女は食した。彼女には (→注 29) インドラとヴィヴァスヴァント (輝き亘る者) とが生まれた。[祭主は(?)] 婆羅門接待用の粥を炊く。他ならぬ精子をそのことによって置くことになる。婆羅門たちは粥を食する。[献供用の] バターが残ったら、それを焚き木たちに塗りつけて [祭火に] くべる。残りからアディティは精子を [自らの中に] 置いた (受胎した) のだ。他ならぬ残りから、そのことによって [祭主の妻は] 精子を [自らの中に] 置くことになる。

この章は、MS と同じく、*agnyādheya* (祭火設置祭) における *brahmaudana* (婆羅門ないし祭官に粥を振る舞う儀礼) を題材とする (→注 4, 注 8)。ここにはアディティの流産という主題は現れない。アーディッテヤたちの発生

過程と諸伝承の間に見られる関係については、5. 参照。

3.3. Vādhūla (Śrautasūtra)-Anvākhyāna I 4 (I 3.1)³¹

idaṃ vā anvāhur. aditiḥ putrakāmā=tasyai vyṛddham āṇḍam ajāyata. tad āṇḍaṅ jātam arejata. tad rājanyo 'bhavad. rejanayo ha vai nāma. tam rājanya ity ācakṣate parokṣeṇa. parokṣapriyā iva hi devās. sādityebhya eva tṛtīyam apacad. etebhya eva putrebhya. bhogāya ma idaṃ śrāntam astv iti. te 'bruvan. varam vṛṇāmahā. athaitad vikariṣyāmo. 'smabhyam eva brahmaudanan nirvaṇān iti⁺ (→注 36). tasmād ādityebhya brahmaudanan nirvaṇanti. tad itthaṃ vyakurvan yathaitarhi manuṣyās. tato yad atyaricyata tasyārdham samadihan. sa hasty abhavat. tasmād dhastinan na pratigṛhṇīyād. ati hi sa puruṣam aricyata. tasmād yan manyetāti vā idaṃ puruṣaṃ ricyata iti tan na pratigṛhṇīyāt. kāmam anyat.

これ(次のこと)を「ひとびとは」語り伝えている。アディティは息子を欲して《サーディヤの神々に婆羅門接待用の粥を炊いた。彼女に彼らは残りを与えた。それを彼女は食した。彼女は精子を(自らの中に)置いた(受胎した)。彼女には4(神)のアーディッタたちが生まれた。彼女は第2(の粥)を炊いた。彼女は思った、「残りから、この者たちが私には(今まさに)生まれた。もし始めに私が食するなら、これよりもっと良い者たちが私には生まれるだろう」と。彼女は始めに食した。彼女は精子を「自らの中に」置いた》。彼女には欠陥を持った卵が生まれた。(《…》には、=記号によって省略された TS VI 5. 6. 1 の部分を補った。)

その卵は生まれると震えた (*arejata*)。その際、王族の者が生じた。³²

³¹ Vādhūla-Śrautasūtra に付随するブラーフマナの物語集。Taittiriya 派所属、I 3-7 は祭火設置祭における振舞粥 brahmaudana を扱う (→注 4, 注 8)。Y. IKARI “A Survey of the New Manuscripts of the Vādhūla School -MSS. of K_1 and K_4 -”, Zinbun 33 (1998[1999]) 1-30 に出版されたテキストと写本の読み(同論文 25f.)に拠る。

³² *tad rājanyo 'bhavat*. 「それは…となった」ならば Kongruenz によって **sa rā-*

[彼は], つまり, *rejanya-* (震える者) という名なのだ。その [彼] を *rājanya-* と [ひとびとは] 語っている, 婉曲によって。神々はちょうど³³婉曲を好むから。

彼女はほかならぬアーディッテヤたちのために第3 [の粥] を調理した。³⁴

ほかならぬこれら [自分の] 息子たちのために。

「この努力の結果が私の役にたつものであれ」と [考えて]。彼らは言った, 「われわれは褒美を選びたい。³⁵

そうしたら, これ (卵) をわれわれは作り変えるだろう。ほかならぬ我々のためにブラフマ・オーダナ (婆羅門たちへの振る舞い粥) を [ひとびとは] 準備して捧げるがよい³⁶」と。それ故, [ひとびとは今日] アーディッテヤたちにブラフマ・オーダナを準備して捧げる。それをかれらは, 今日人間たち (マヌシュの子孫たち) が [現に] そうあるように, そのように作り変えた³⁷。それから, 彼の余った部分, [それを] 捏ね合わせた³⁸。それは象となった (→注26)。それ故, 象を [もらっても] 受け取ってはならない。それは人 (プルシャ) を越えて余った³⁹から。それ故, ひとが, これは人 [の手に] 余ると思うもの, それを受け取ってはならない。[そ

janyo 'bhavat が求められる。後出の *sa hasty abhavat* 「それは象となった」参照。

³³ *iva* 「ちょうど」はブラーフマナの文体。

³⁴ この一文は TS からの引用の省略された部分と締め括りの「彼女には欠陥を持った卵が生まれた」に直接続く部分。*rājanya-* の語源説明部分は VādhAnvākh に独自のもの。次の「ほかならぬこれら息子たちのために」という1文の付加は TS が文の途中で章分け (||1||) を施していることと関連するかもしれない。

³⁵ 「この努力の結果が」から「褒美を選びたい」まで, TS の続き部分。以下, VādhAnvākh 独自の内容に移るが, ŚB-ŚBK の Mārtāṇḍa の神話に基づく可能性が考えられる。

³⁶ Ed. IKARI *nirvvaṇī*-iti, “Thus emended. K₄: *nirvvaṇī*”. K₄ の読みを採用。ヴェーダ語の Konjunktiv (古風な表現)。

³⁷ 注44参照。

³⁸ *samadihan*: 「肉体」について用いられる *saṃ-dehā-*, さらに, 後の Skt. の *deha-* 「肉体」参照。ŚB-ŚBK は *saṃ-ny-as* 「集め合わせる」を用いている。

³⁹ つまり, 死産した子を人に作り変えたときの残りの部分であったから。

れ] 以外は構わない。

4. シャタパタ・ブラーフマナ (ヴァージャサネーイン派)

4.1. Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyaṇdina) III 1,3,1-6⁴⁰

1 *apāh prañīya | āgnāvaiṣṇavām ekādaśakapālam puroḍāśam nirvaṇaty. agnir vai sārva devatā. agnau hi sārvaḥbhyo devatābhyo jūhvaty. agnir vai yajñāsyaṇvarārdhyo viṣṇuḥ parārdhyās. tāt sārvas caivaitād devatāḥ parigr̥hya sārvaṃ ca yajñam parigr̥hya dikṣā iti. tasmād āgnāvaiṣṇavā ekādaśakapālah puroḍāšo bhavati.*

2 *tād dhāike | ādityébhyaś caruṃ nirvaṇanti. tād asti páryuditam ivāṣṭáu putráso áditer¹ yé jātās tan_uvās pári¹ devāṃ úpa práit saptábhīḥ¹ párá mārta_añḍám āsyad iti.*

3 *aṣṭáu ha vai putrá áditeḥ. | yāms tv etād devā ādityā ity ācāksate saptá haivá té. 'vikṛtam hāṣṭamám janayām cakāra mārtañḍám. samdeghó haivāsa. yāvān evōrdhvās tāvāms tiryāñ pūruśasammīta ity u háika āhuḥ.*

4 *tá u haitá ūcuḥ | devā ādityā. yád asmán ánv ájani má tād amuyēva bhūd. dhántemám vikarāvāmēti. tam vicakrur yáthāyám pūruśo vikṛtas. tāsya yāni māmsáni samkṛtya samnyāsús táto hasti sámabhavat (→注 45). tasmād āhur ná hastīnam prátigṛhñīyāt pūruśājāno hí hastīti. yám u ha tād vicakrúḥ sá vívasvān ādityás. tāsyesmāḥ prajāḥ.*

5 *sá hovāca. | rādhnāvān (→注 46) me sá prajāyám yá etám ādityébhyaś caruṃ nirvaṇat (→注 46) iti. rādhnóti haivá yá etám ādityébhyaś caruṃ nirvaṇaty. ayám tv evāgnāvaiṣṇavāḥ prájñātaḥ.*

1 水たちを運んだ後、アグニ *agni-* とヴィシュヌ *viṣṇu-* とに対する 11

⁴⁰ Cf. HOFFMANN 前掲論文 92 = Aufs. II 427f. ŚBK IV 1,3,1-4 (4.2.) は同一の筋を持つが、表現はやや冗長である。ソーマ祭の準備としての dikṣā (潔斎) 中に行われる Agni と Viṣṇu とに捧げる puroḍāśa (パンケーキ) に引き続き、アーディッテャたちに対する粥の献供を行う人々がある旨を述べ、その根拠として引く。

皿分のパンケーキを準備して捧げる(→注20)。アグニは神格たち全てなのだ。アグニの中に神格たち全ての為に[ひとびとは] 献供するから。アグニは祭式のこちら側に位置する, ヴィシュヌはあちら側に位置する。⁴¹それは、「神格たちを全てこのことによって包摂し、そして、祭式全てを包摂して私は潔斎を行うのだ (*dikṣai*)」と [考えてである]。それ故、アグニとヴィシュヌとに対する 11 皿分のパンケーキが用いられる。

2 その際、つまり、ある人々はアーディッテヤたちに粥を準備して捧げる(→注20)。それを巡って、ちょうど議論されたものがある:「自身から生まれた 8 人の息子たちがアディティには [あった]。7 人を伴って [彼女は] 神々のもとへ去った。マールターンダを [彼女は] 捨てた」(RV X 72,8, →6.) と。

3 アディティには 8 人の息子が [あった]⁴²のだ。しかし、この際、アーディッテヤの神々たち (アディティの息子たちである神々) と [ひとびとが] 述べるときには、彼らは、つまりは、7 人である。成形されていない者を [彼女は] 8 番目に生んだ、マールターンダを。この者は、つまりは、捏ねた塊であった。上への [高さ] だけ、横に [幅] がある、人と同じ大きさで [あった]⁴³と、つまり、ある人々は言っている。

4 そこで、また、このアーディッテヤの神々は言った、「我々に続いて生まれたもの、それがまさしく惨めであってはならない。そうだ、この者を成形しよう」と。[彼らは] 彼を成形した、この [地上の] 人が (現に) 成形されてあるように。⁴⁴ [彼らが] 彼の肉たちを切り離して集め合わせ

⁴¹ *avarārdhyās, parārdhyās* ~ ŚBK IV 1, 3, 1 *avarārdhās, parārdhās* 「こちら側、あちら側である」。

⁴² *ha* を Perf. とともに用いられるそれと判断して、*āsa* を補う。

⁴³ *yāvān evōrdhvās tāvāms tiryān pūruṣasammitas ity u hāika āhuḥ* 「上への [高さ] だけ、横に [幅] がある、人と同じ大きさの者で [あった] と、つまり、ある人々は言っている」 ~ ŚBK IV 1,3,2 *sā ha pūruṣamātrā evōrdhvā āsa pūruṣamātrās tiryān* 「彼は上へ向かって人の大きさであり、横へ向かって人の大きさであった」。

⁴⁴ *vi-kar/kr* 「成形する」 (cf. JB I 267 *pañcame māsi garbhā vikriyante* 「五ヶ月目ののち、胎児たちは形作られる」、HOFFMANN 上掲論文 92=428) は中国神話の「混沌」を想起させる。→注 37。

た、それ(肉たち)から象が生じた⁴⁵。それ故 [ひとびとは] 言っている、「象を(報酬として)受け取ってはならない。象は人を発生もととするから」と。また、その際 [彼らが] 成形した者、それはアディティの息子ヴィヴァスヴァント(輝き亘る者)と [なった] (→注45, 注12, 注14)。この(地上の)者たちは彼の子孫たちである。

5 彼(ヴィヴァスヴァント)は言った、「アーディッテヤたちにこの粥を準備して捧げることになる者は、私の子孫において成功することになるう」⁴⁶と。アーディッテヤたちにこの粥を準備して捧げる者は、つまり、成功する。しかしながら、このアグニとヴィシュヌとに対する [11 皿分のパンケーキ] は既定のことである(必ず行われる: *prājñātam*)。

4.2. Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva) IV 1.3.1-4

1 *sā vā etām āgnāvaiṣṇavām ekādaśakapālaṃ puroḍāśaṃ nirvapati dikṣaṇīyam. tād yād etād āgnāvaiṣṇavām dikṣaṇīyam havir bhāvaty — agnir vāi sāvā devātā. agnāu hi sāvābhyo devātābhyo juhvaty. agnir vā avarārdhō yajñāsya viṣṇuḥ parārdhās. tāt sāvās ca devātā iti. sāvam ca yajñam pariḡṛhya dikṣā iti — tāsmād āgnāvaiṣṇavō bhavati.*

2 *tād āhur. ādityébhyō 'pi caruṃ nirvaped iti. tād āpy etād "aṣṭāu putrāśo āditer¹ yé jātās tan_avās pári¹ devám úpa prāit saptābhīḥ¹ párá mārta_añḍām āsyad" ity. aṣṭā (+aṣṭāu) ha putrāśo 'dites. tātas té saptā yé devā yé devatrātha*

⁴⁵ *tāto hastī samabhavat* ~ ŚBK IV 1.3.3 *tāt samkartanām āsa tāt sārđham sāmny-āsuḥ. sā hasty ābhavat* 「その切り取られていたもの、それを、一緒に集め合わせた。それは象になった」。両版ともに、Perfekt による語りの文中に Imperfekt が用いられている。語りの枠外にある神学的解釈と考える事ができる、cf. Gorō "Purūravas und Urvasī' aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākhyāna (Ed. IKARI)" (Anusantatyai. Fs. Narten, 2000, 79-110) 97f., 「新資料 Vādhūla-Anvākhyāna の伝える『Purūravas と Urvasī』物語」(神子上恵生教授頌寿記念論集『インド哲学佛教思想論集』, 2004, 845-868) 853-855。

⁴⁶ Konjunktiv *rādhnāvāt*, *nirvapat* は未来(予定)の機能をもつが、Vivasvant の語りとして古風な(もったいぶった)言い方を採用したものであろう。ŚBK では、さらに *upanāmād* が先行。

hāṣṭamām janayāṃ cakāra mārtaṇḍām ity. avikṛtam ivaivā saṃdeghām ivaivā. sā ha puruṣamātrā evōrdhvā āsa puruṣamātrās tiryān.

3 *té hemá ādityá ūcuḥ. máyám amuyá bhūd iti. hántemām saṃkṛtāma yáthāyám pūruṣa evám vikarāvāmainam iti. tám ha sámcaṅkṛtus. tám ha vícakraṣ yáthāyám pūruṣa evám. tát saṃkartanám āsa tát sārddham sámnyāsuḥ. sā hasty ābhavat (→注 45). tásmād dhastī duṣpratigrahá ity āhuḥ. pūruṣaḥ pratigṛhyam iva tát yó hastinám pratigṛhñád (⁺pratigṛhñyád?) iti. tát yám tám samákr̥ntan yám vyákr̥vant sā vívasvān ādityás. tásyemāḥ prajā. vaivasvatyó (→注 48) yád idám kīm ca.*

4 *sá hovāca. yán me prajāyām yajñá upanámād (→注 46) iti rādhnavad (→注 46) evá sá yá ādityébhyaś carúm nirvápād (→注 46) iti. rādhnoti haivá sá yá evám vidvān ādityébhyaś carúm nirvāpatītarām tv evá prājñātam yád etád āgnāvaiṣṇavam dikṣaṇīyam havír bhāvati.*

1 彼は(アドヴァリユ祭官は、[または:] ひと) このアグニとヴィシュヌとに対する、潔斎用の 11 皿分のパンケーキを準備して捧げる(→注 20)。その際、このアグニとヴィシュヌとに対する潔斎用の供物が用いられるということは、——アグニは神格たち全てなのだ。アグニの中に神格たち全ての為に [ひとびとは] 献供するから。アグニは祭式のこちら側である。ヴィシュヌはあちら側である。そのことによって、「神格たち全てを」と、「そして、祭式全てを包摂して私は潔斎を行うのだ」と [考えてである]。——それ故、アグニとヴィシュヌとに対する 11 皿分のパンケーキが用いられる。

2 それについて、ある人々は言っている、「アーディッテヤたちに粥をも準備して捧げるべきである」と。それについて、このようにも [言われている]: 「自身から生まれた 8 人の息子たちがアディティには [あった]。7 人を伴って [彼女は] 神々のもとへ去った。マールターンダを [彼女は] 捨てた」と (RV X 72.8)。「アディティには 8 人の息子たちが [あった⁴⁷]。それから、神々である、神々のもとにあるのは 7 人である。だが、8 人目を [彼女は] 生まれさせた、マールターンダを」と。[彼は] まさ

しく成形されていない、まさしく捏ねた塊 [であった]。彼は、上へ向かってほかならぬ人の大きさをもっていた、横に向かって人の大きさを。

3 彼ら、このアーディッテャたち (神々) は言った、「この者は惨めであってはならない」と。「そうだ、この者を切り取ろう。ちょうど、この [地上の] 人がそうあるように、当の者を成形しよう (→注 44)」と。彼を [彼らは] 切り取った。彼を [彼らは] 成形した、この [地上の] 人がそうあるように、そのように。その際、切り取り部分であったもの、それを [彼らは] 集め合わせた。それは象となった。それ故、「象は受け取るに相応しくない」と [ひとびとは] 言っている。「象を受け取る者があれば、それは、ちょうど人が受け取られることになる」と。その際、彼らが切り取ったその者、成形した者、それはアディティの息子ヴィヴァスヴァント (輝き亘る者) と [なった] (→注 45, 注 12, 注 14)。これらの (地上の) 者たちは彼の子孫である。ここにあるものは何でもヴィヴァスヴァントの子孫⁴⁸である。

4 彼 (ヴィヴァスヴァント) は言った、「もし、私の子孫の中に、祭式が寄り従うがよい (→注 46)、と [考える者が] あれば、まさしく彼は成功することになる (→注 46)、もし彼がアーディッテャたちにこの粥を準備して捧げることになれば (→注 46)」と。もし、このように知っていてアーディッテャたちにこの粥を準備して捧げるならば、つまりは、成功する。しかしながら、もう一方の、このアグニとヴィシュヌとに捧げられる潔斎用の供物が用いられるということは、既定のことである (必ず行われる: *prājñātam*)。

5. 諸伝承間の関係

人類と死とが女神の流産から生じたとする神話の存在がインド・イラン

⁴⁷ *ha* はおそらく Perfekt *āsur* を予定する。

⁴⁸ Ed. CALAND *vaivasvatyó*, “Read *vaivasvátýo* (i. e. *vaivasvatýo*)?” と注記。 *vaivasvatyám* (あるいは *vaivasvatyám*) も考えられる。

共通起源に遡ることは、イラン側の伝承からも疑いが無い。「死すべき者(人)の命」を意味する(→注3)、新アヴェスタ語 *Gaiia- Marətan-*、パフラヴィー語 *Gayōmart* を巡る伝承は、断片的ではあっても、Mārtāṇḍa 神話と結び合わされる。人間が *Gayōmart* の子孫としてその似姿として生まれたこと、*Gayōmart* の身体の幅と高さと同じであったとする ŚB-ŚBK に通じる記述などが中期ペルシャ語の *Bundahišn* に見られることは特に注目される。ヴェーダ散文に語られる上記の諸伝承は、そうした古い神話をそれぞれの祭式の文脈に用いて語られたものと解釈される。

MS, TB, VādhAnvākh は祭官たちへの振る舞い粥を主題とする。MS (1.) の語るところが最も多くの項目を含み、完全形に近いと思われる。ただし、標準的なアーディッテヤたちの序列 *Varuṇa, Mitra, Aryamaṇ, Bhaga, Amśa* と異なり、*Dhātar* を *Aryamaṇ* と共に始めに置き、*Mitra* と *Varuṇa, Amśa* と *Bhaga* の2組が続き、*Dakṣa* を欠く3組6神の誕生を語る。⁴⁹ 4番目の粥から生じる Mārtāṇḍa の基になる胎児は単数で示されながら、体内で発言する主体は Dual で述べられる。*Indra* が流産した胎児の生气について天界に昇る。地上に落ちた Mārtāṇḍa は *Manu* と *Yama* の祖 *vivasvān ādityās* 「アディティの息子ヴィヴァスヴァント(輝き亘る者)」である。TB (3.1.) は MS に見られるこのヴァージョンをほぼ完全に引き継ぐが、Mārtāṇḍa に関する神話部分を欠く。さらに、TS にある *Sādhya* 神たちへの言及を冒頭に置いている。

MS, TB 以外の KS, TS, ŚB-ŚBK, VādhAnvākh には、個々のアーディッテヤ神の誕生次第は語られず、「アーディッテヤたち」と一括りに述べられる(TSでは「4アーディッテヤ」)。

KS (2.) は王権復帰のための願望穀物祭の文脈に神話を利用し、第1の粥によるアーディッテヤ神たちの誕生、第2の粥による特別な胎児の妊娠と流産、第3の粥によるアーディッテヤ神たちへの胎児の生存への懇願を述べる。この経過は TS に共通する。KS には、生きている部分が(人類の

⁴⁹ *Mitra-Varuṇa* の順序は通常の *Devatādvandva mitrā-varuṇa-* に倣うものとも考えられる。

始祖に連なる) *vivasvān ādityás* 「アディティの息子ヴィヴァスヴァント(輝き互る者)」に、死んだ部分が象となる経緯が語られる。このモチーフは RV X 72 の創造讃歌に添って神話を語る ŚB-ŚBK にも受け継がれる。TS は *vivasvān ādityás* にのみ (MS に同じ), VādhAnvākh は象にのみ言及する。VādhAnvākh (3.3.) は TS を前提に神話を語るが、象の発生については ŚB-ŚBK の話を下敷きになっている。MS では欠陥を持って生まれる胎児は二人分であったが、KS 以降の伝承では単数である。ただし、ŚB-ŚBK における胎児は高さも幅もヒト一人分の大きさ (つまり、二人分の大きさ) を持つとされる。流産した胎児の様相、その成形は、KS, TS, ŚB-ŚBK の順に、より具体的になる。

TS (3.1.) はソーマ祭の *ādityagraha* (アーディッテャたちへのソーマ汲み、→注 27) の文脈に神話をを用い、KS と共通する経過を述べる。

ŚB (4.1.), ŚBK (4.2.) はソーマ祭のための潔斎 *dikṣā* の文脈で、RV X 72 (→6.) に見られるアディティからの息子たち 7 神の誕生を典拠として、アーディッテャ神たちに捧げる粥 (単数) の献供の選択肢を語る。その中で、アディティが 8 番目に身籠もった「捏ねた塊」Mārtāṇḍa の成形と人類の始祖たるヴィヴァスヴァント (*vivasvān ādityás*) の誕生、死んだ部分からの象の発生が語られる。*mārtāṇḍā-* の名を直接挙げるのは MS, RV を引く ŚB-ŚBK である。

6. (参考) リグヴェーダ X 72 「アディティと神々の誕生」

Mārtāṇḍa 神話への最古の言及を記録するリグヴェーダ X 72 を、テキストと訳とを合わせて参考に挙げる。詳しい考察と解釈の可能性については、後藤敏文「人類と死の起源 —リグヴェーダ創造讃歌 X 72—」, 佛教文化学会十周年, 北條賢三博士古稀記念論集『インド学諸思想とその周延』, 2004, 415-432 を見られたい⁵⁰。

⁵⁰ プラトーンの Symposium 『饗宴—恋愛について—』に於いて、アリストパネースが語る恋愛起源説に登場する 4 手・4 脚・2 顔 1 頭 (4 耳) …の体力優れ、驕

- 1 *devānām nū vayām jānā* *prā vocāma vipanyāyā |*
ukthēṣu śasyāmāneṣu *yāḥ pāsyaḍ ūttare yugē ||*
 神々の(諸々の)生れを、今、我々は
 公言したい、昂揚の中に、
 (以下に)言挙げされる(諸々の)讃辞の中に、
 ひとがもし、(この)後の代(世)に見ることになるならば。
- 2 *brāhmaṇas pātir etā* *sām karmāra ivādhamat |*
devānām pūrvīyē yugē *'āsataḥ sād ajāyata ||*
 brāhmaṇ の主がこれらを
 鍛冶屋のように溶融(鍛造)した。
 神々の原初の代(世)に於いて、
 非存在から存在が生まれた。
- 3 *devānām yugē pṛathamé* *'āsataḥ sād ajāyata |*
tād āśā ānv ajāyanta *tād uttānāpadas pāri ||*
 神々の最初の代(世)に於いて、
 非存在から存在が生まれた。
 それに引き続き、(諸々の)領域が生まれた。
 その際、足(足の裏)を上向きに広げた者から。
- 4 *bhūr jajña uttānāpado* *bhuvā āśā ajāyanta |*
āditer dākṣo ajāyata *dākṣād ūv āditiḥ pāri ||*
 地が足(足の裏)を上を広げた者から生まれたのだ。
 地から(諸々の)領域が生まれた。
 Aditi(「無拘束」)から Dakṣa(「能力」)が生まれた。
 Dakṣa からは、また、Aditi が。
- 5 *āditir hīy ājaniṣṭa* *dākṣa yā duhitā tāva |*
tām devā ānv ajāyanta *bhadrā amṛtabandhavaḥ ||*

慢な、球体の存在 (Androgynos) の男と女とへの 2 分割、Bṛhadāranyaka-Upaniṣad I 4 冒頭に見られる、男女が抱き合った大きさをもつ、人間の姿をした最初の ātman が自身を二分割して子孫を作ったことなどにも連なる可能性に触れた。

Aditi は実に生まれたのだ、
Dakṣa よ、君の娘である [Aditi は]。
彼女に引き続き、神々が生まれた。
幸をもたらし、不死を繋累にもつ [神々] が。

- 6 *yād devā adāḥ salilē* *sūsamrabdhā ātiṣṭhata* |
ātrā vo nṛtyatām iva *tivró reṇúr āpāyata* ||

神々よ、君たちが、あの時、(原初の) 海の上に、
よく捕まり合いながら立っていた時、
その時、君たちの (または、君たちから) 激しい埃 (飛沫) が、
踊る者たちの [それの] ように、飛び散っていた。

- 7 *yād devā yātaḥ yāthā* *bhūvanānīy āpīnvata* |
ātrā samudrā ā gūḍhām *ā sūryam ajabhartana* ||

神々よ、君たちが、Yati たちが [した] ように、
諸世界を充満させた時、
その時には、君たちは、海の中に隠されてあった
太陽を、運び出したっていた。

- 8 *aṣṭāu putrāso āditer* *yé jātās tanāvās pári* |
devām úpa prāit saptābhiḥ *pārā mārtaṇḍām āsīyat* ||

8 人の息子たちが Aditi には [あった]、
自身から生まれたところの。
彼女は、7人とともに、神々のもとへと去った。
Mārtāṇḍa を [彼女は] 捨てた。

- 9 *saptābhiḥ putráir āditir* *úpa prāit pūrvīyām yugām* |
prajāyai mṛtyāve tīvat *pūnar mārtaṇḍām ābharat* ||

7 人の息子たちとともに、Aditi は
原初の代 (世) のもとへ去った。
子孫の為に (子孫をもたらすべく)、他方また、死の為に (死をもたらすべ
く)、
彼女は Mārtāṇḍa を連れ戻した。

略号

ĀpŚrSū	Āpastamba-Śrautasūtra
AV	Atharvaveda (Saṁhitā), Śaunaka 伝本
AVP	Atharvaveda (Saṁhitā), Paippalāda 伝本
BĀU	Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad (Mādyandina 伝本)
BĀU-K	Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad (Kāṇva 伝本)
JB	Jaiminiya-Brāhmaṇa
KS	Kaṭha-Saṁhitā
MS	Maitrāyaṇī Saṁhitā
RV	Ṛgveda (Saṁhitā)
ŚB	Śatapatha-Brāhmaṇa, Mādhyandina 伝本
ŚBK	Śatapatha-Brāhmaṇa, Kāṇva 伝本
TB	Taittirīya-Brāhmaṇa
TS	Taittirīya-Saṁhitā
VādhAnvākh	Vādhūla-Śrautasūtra-Anvākhyāna

文法用語はドイツ語のそれを基本とした。

Summary

The Myth of Mārtāṇḍa ‘Descendant
of a Dead Egg’ in the Vedic prose

Toshifumi Gotō

K. HOFFMANN collected, translated and analyzed the Mārtāṇḍa myth attested in various places in the Vedic prose (i. e., the “*brāhmaṇa*”s in the Black Yajurveda Saṃhitās and the Brāhmaṇas). Based on his investigation of fragmentary references in Young Avestan and Pahlavi, he traces a myth about the origin of human beings from a miscarriage back to the the common Indo-Iranian period. In the Rigveda, the word *mārtāṇḍā-* has been traditionally interpreted as ‘bird’, sometimes identified with the sun. HOFFMANN shows, however, that the term in the Rigveda also means “a descendant of a dead egg” (see K. HOFFMANN, *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 11, 1957, 85–103 = *Aufsätze zur Indoiranistik* II, 1976, 422–438; English version in *German Scholars on India* II, 1976, 100–117 = *Aufs.* III, 1992, 715–735).

My paper revisits the materials of the myth handed down in various versions in the Vedic prose. For this, I also look into the Taittirīya-Brāhmaṇa I 1, 9–3 and the Vādhūla-Śrautasūtra-Anvākhyāna I 4, alongside the texts examined by HOFFMANN: (1) Maitrāyaṇī Saṃhitā [MS] I 6, 12: 104, 9–105,7; (2) Kaṭha-Saṃhitā [KS] XI 6: 151,3–151,19; (3) Taittirīya-Saṃhitā [TS] VI 5,6,1–2; (4) Śatapatha-Brāhmaṇa [ŚB] III 1,3,1–6; plus Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva) [ŚBK] IV 1,3,1–4.

The relations among the different versions of the myth are discussed in Chapter 5. The MS gives the most complete version of the story: The *Ādityas* ‘sons of *Aditi*’ were born in pairs, *Dhātara-Aryaman*, *Mitra-Varuṇa*, and *Amśa-Bhaga*, from the leftovers which *Aditi* ate each time out of the

gruel offered to the priests. She also conceives mighty twins (an embryo having the capacities of two persons) from the forth gruel she ate before offering to the priests. The *Ādityas* are afraid of the embryo's powers as well as potential hegemony in future, and cause a miscarriage. Then Indra goes upward following the living breath of the miscarried fetus, and *Mārtāṇḍa*, 'the descendant of a dead egg', falls down and becomes *Vivasvant Āditya*. From him, *Manu* and *Yama* were born.

The TB version takes over the MS version almost completely, and introduces it with a sentence about the *Sādhyā* gods found in the TS. The KS tells the story of the *Aditi*'s first eating (i. e., the birth of the *Ādityas*), of the second eating (the conception of a mighty embryo of which the *Ādityas* are afraid and whose miscarriage they cause), of the third gruel offered to the *Ādityas* (saving the fallen fetus and shaping it into a human body). The living part of the fetus becomes *Vivasvant Āditya*, and the dead part an elephant. The TS follows this outline, but refers, just as in the MS, only to *Vivasvant Āditya* as the progenitor of the human beings, without mentioning the elephant.

The ŚB-ŚBK version is set into the context of the creation hymn Rigveda X 72, and tells of the birth of seven *Ādityas* and *Mārtāṇḍa* from *Aditi*. The story of the origin of *Vivasvant Āditya* and the elephant is similar to the KS version.

The Vādhūla version cites the TS passage and adds a sequel to the story merely of the elephant's origin, apparently on the basis of the legend told in the ŚB-ŚBK.

The paper contains notes on grammar and terms. I also add the original text and translation of Rigveda X 72, creation hymn on *Aditi*, as an appendix (for a detailed study of the hymn, cf. Fs. Hōjō 2004).

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

